

青年期における性役割タイプと適応について

山本 雅代

現代の青年期の学生はどのような性役割特性を持ち合わせているのか。彼らは環境にうまく適応しているのだろうか。性役割特性と現在の生活満足感や将来の仕事への意識には一定の関係が見られるのか。本調査では、被調査者の性役割特性を Bem (1974) のいう4つのタイプすなわち未分化、男性性、女性性、アンドロジニーに分類し、上記の事柄について調査を行なった。主な結果は以下の通りであった。(1)アンドロジニータイプの人他は他のタイプより最も適応的であり、未分化タイプの人には逆に最も不適応的であった。(2) 伝統的な性役割観がくずれつつある現代においても、女性の多くは女性性の特性を有しており、かつ不適応的であった。(3) アンドロジニータイプの人、生活や人生に満足感を持って生活していることが示唆された

キーワード：性役割タイプ、アンドロジニー、個人志向性、社会志向性、適応

1. はじめに

いわゆる男らしさ女らしさは性別にもとづいて周囲、社会からこうあるべき、こうあってほしいと期待されている役割（性役割期待）なので、社会、文化によって異なるのは当然である。なぜなら、生物学的な性差が生得的で絶対的なものであるのに対し、心理学的な性差である性役割は、生まれてから後の学習、経験を通して獲得、形成される男性性、女性性であるので相対的であり、社会や文化また時代によって異なるのである。Broveman (1972) らは、男性には、独立的、客観的、行動的、論理的、自信のある、競争的など有能さに集約される特性が、一方女性には、優しさ、他人の気持ちに敏感な、温かな感情表現ができるなど温かさや表出性といった特性が求められていることを明らかにしている。さらに性役割特性に関しても彼らは一般的には男性特性の方が女性特性よりも肯定的にとらえられているという事実をみいだしている。このような男性性、女性性を一次元の両極として捉えてきた従来の考え方に対して、Bem(1974)は男性性、女性性はそれぞれ独立した二次元的なものであると主張した。そこで彼女は、BSRI(Bem's Sex Role Inventory)を作成し、従来の一次元では弁別することができなかった性役割特性を男性性、女性性というそれぞれ独立した二次元の尺度上に並べ以下の心理学的な4つの性役割タイプに分類した。それらは、アンドロジニータイプ (Androgynous 両性的で男性性、女性性特性の得点が共に高い)、男性性タイプ (Masculine 男性的で男性性特性の得点が高い)、女性性タイプ (Feminine 女性的で女性性特性の得点が高い)、未分化タイプ (Undifferentiated 未分化的で男性性、女性性特性の得点がともに低い) の4タイプである。なかでもアンドロジニータイプの人、男性性、女性性特性を同程度多く備えた心理的両性性の持ち主であり、環境に対して適応

的でかつ心理的にも健康なタイプの人であるという。

Bemの理論は広範囲に受け入れられており、日本においても、男女問わず獲得した性役割が男性性、女性性特性のどちらかに偏ることなく両性を持ち合わせているほうが心理的に適応的であるという報告がなされている。また両性性タイプは男性に多く、女性では女性性タイプが多く、かつ不適応を起こしやすいという指摘がされている(下中ら, 1990)。

この女性に女性性タイプが多いといった指摘やBrovemanらの男性特性優位といった報告の背景には男性が家計を維持し、女性は家庭に入り家事育児を行うといった従来の社会が求める性役割特性が前提になっている。

しかし、Bemも指摘したとおりその男女分業的性役割がくずれつつある現代の社会では男女どちらかの性役割に偏るのではなく、男性性、女性性をともに備える事、社会的に適応して生きていくにはアンドロジニーであることが最も心理的に健康であり、また好ましいパーソナリティであると思われる。

また場合によっては社会から期待される性役割と自己の性役割観との間にズレを生じ社会に葛藤を抱く事で不適応を引き起こすことも考えられ、どのような性役割観を有しているかによって、個人がどううまく自分らしく社会を生きるか否かが左右されると考えることもできる。

これらのことから現代の青年期の学生がどのような性役割タイプを有し、それに応じてどのように心理社会的に適応・不適応的であるのか、また、その性役割タイプや適応状態が現在の学生生活、友人との関係、将来への考え方へに影響しているのかといったと関係性、性役割の重要性について検討することを目的とした。

2. 方 法

(1) 調査対象

仁愛大学心理学科の学生(男性66名, 女性154名, 計220名)と大阪府内の大学文化系学部の学生(男性52名, 女性12名, 計64名)合計284名(男性平均19.44歳, 女性平均19.76歳)を対象とした。

(2) 材料と手続き

調査には以下のような質問を行った。

BSRI: 性役割パーソナリティを測定するため安達ら(1985)がBSRIを日本人向けに改良した尺度によって測定した。日本語版BSRI(男性性に関する項目20項目, 女性性に関する項目20項目の全40項目)に対する評定を「非常にあてはまる=7」から「非常にあてはまらない=1」の7ポイントスケールで回答してもらい、各人の男性性得点, 女性性得点を算出し、全体の中央値をそれぞれ求め、被調査者を以下のように4タイプに分類した。男性性, 女性性得点がともに中央値より高い場合をアンドロジニータイプ、ともに低い場合を未分化タイプ、性別に関係なく、男性性得点が中央値より高いものを男性性タイプ、性別に関係なく、女性性得点が中央値より高いタイプを女性性タイプ、とした。

個人志向性社会志向性PN尺度: 適応を測定する尺度として個人志向性社会志向性PN尺度(伊藤, 1993.1995)を用いた。この尺度は、人格発達や適応の過程で個人が重視する基準を、個性的、主体的に個としての自分を生かそうとする個性化を目指す「個人志向性」と他者との調和

表1. 因子分析の結果

| 質問項目 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 |
|-----------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 第1因子：人生満足 | | | | |
| ・人生は理想どおりである | .84 | | | |
| ・自分の人生に満足している | .79 | | | |
| ・自分が人生の中で望んでいる重要なものを手に入れている | .79 | | | |
| 第2因子：学生生活満足 | | | | |
| ・友人関係はうまくいっている | | .79 | | |
| ・学生生活に満足している | | .69 | | |
| ・学業にまじめに取り組んでいる | | .56 | | |
| 第3因子：仕事優先因子 | | | | |
| ・仕事は一生続けたい | | | .87 | |
| ・子どもがいても仕事は続けたい | | | .86 | |
| 第4因子：理想的結婚 | | | | |
| ・幸せな結婚がしたい | | | | .79 |
| ・離婚はしたくない | | | | .65 |
| ・一生家族と一緒にくらしたい | | | | .63 |
| 因子寄与 | 2.23 | 1.62 | 1.55 | 1.47 |
| 寄与率 | 20.32% | 14.74% | 14.01% | 13.34% |
| 累積寄与率 | 20.32% | 35.06% | 49.11% | 62.45% |

的共存や社会への適応といった社会化を目指す「社会志向性」に区別し適応をみる、さらに個人の肯定的な自己実現的特性の個人化や他者との共存、相互依存的特徴の社会化などポジティブ（適応的）な個人志向・社会志向性の側面と自己中心的、未成熟な個人化と他者依存的特性などの社会化をネガティブ（不適応的）な個人志向・社会志向性の側面とし、肯定的否定的側面を別々に測定するように作られている。ポジティブな個人志向性8項目と社会志向性9項目、計15項目とネガティブな個人志向性6項目と社会志向性7項目、計13項目それぞれに対して「あてはまる=5」から「あてはまらない=1」まで5ポイントスケールで評定を求め、4種類の志向性得点（P+：ポジティブな個人志向、S+：ポジティブな社会志向、P-：ネガティブな個人志向、S-ネガティブな社会志向）を算出した。

満足感、将来についての質問：人生についての満足感、生活についての満足感、将来への考え方として仕事や結婚についての簡単な質問、計17項目について「あてはまる=5」から「あてはまらない=1」まで5ポイントスケールで評定を求めた（人生満足感等についてはDienerの生活満足感尺度（1985）を参考にし、その他の項目については自分で作成した。）17項目に対して主成分法、バリマックス回転の因子分析を行い因子解釈の可能性から4因子が妥当であると判断した。因子負荷量が.40に満たない項目や2因子にまたがっている項目計6項目を除いて再度、因子分析を行なった結果、計11項目、4因子が抽出された。第1因子は人生満足因子、第2因子は学生生活満足因子、第3因子は仕事優先因子、第4因子は理想的結婚因子とした。因子ごとに合計得点を求め、得点が高いほどその傾向が高いとした。

3. 結 果

性役割タイプ別人数の割合を図1に、志向性別に性役割タイプごとの各志向性得点の平均値とSDを表1に示す。

各志向性ごとに、性別（男性、女性）と性役割タイプ（未分化、男性性、女性性、アンドロジニー）を独立変数とし、各志向性（P+, S+, P-, S-）得点の平均値を従属変数とした2×4の分散分析を行った。

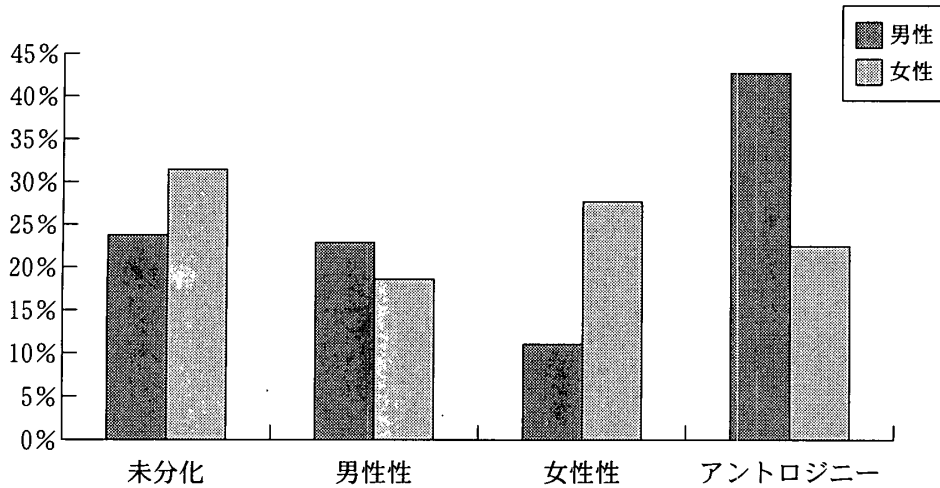


図1. 性役割タイプごとの男女の割合

表2. ポジティブな個人志向性(P+)・社会志向性(S+)における各条件別平均値とSD

| P+ | 性役割タイプ | | | | S+ | 性役割タイプ | | | |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------|
| | 未分化 | 男性性 | 女性性 | アンドロジニー | | 未分化 | 男性性 | 女性性 | アンドロジニー |
| 男性 | 2.83 (0.55) | 3.62 (0.63) | 2.64 (0.45) | 3.57 (0.61) | 3.23 (0.60) | 3.36 (0.53) | 3.72 (0.40) | 3.90 (0.50) | |
| 女性 | 2.71 (0.70) | 3.39 (0.59) | 2.98 (0.55) | 3.71 (0.59) | 3.48 (0.47) | 3.75 (0.40) | 4.01 (0.40) | 4.05 (0.41) | |

() 内SD

表3. ネガティブな個人志向性(P-)・社会志向性(S-)における各条件別平均値とSD

| P- | 性役割タイプ | | | | S- | 性役割タイプ | | | |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------|
| | 未分化 | 男性性 | 女性性 | アンドロジニー | | 未分化 | 男性性 | 女性性 | アンドロジニー |
| 男性 | 3.08 (0.69) | 3.43 (0.60) | 2.68 (0.50) | 3.04 (0.66) | 3.51 (0.64) | 2.98 (0.55) | 3.71 (0.53) | 3.15 (0.63) | |
| 女性 | 2.99 (0.69) | 3.18 (0.58) | 2.59 (0.60) | 2.85 (0.73) | 3.66 (0.59) | 3.15 (0.61) | 3.80 (0.53) | 3.25 (0.62) | |

() 内SD

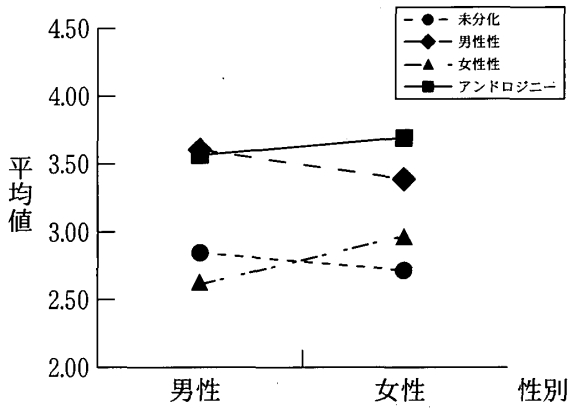


図2. P+における性役割タイプごとの平均値

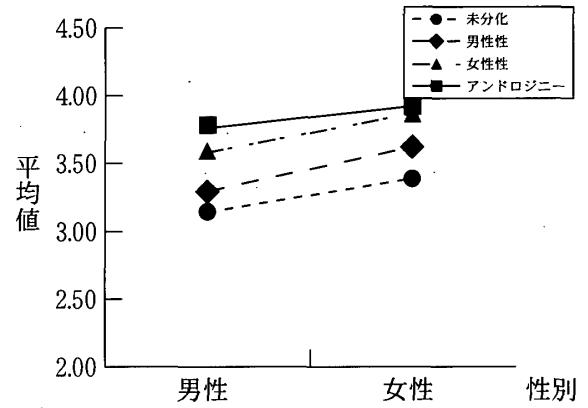


図3. S+における性役割タイプごとの平均値

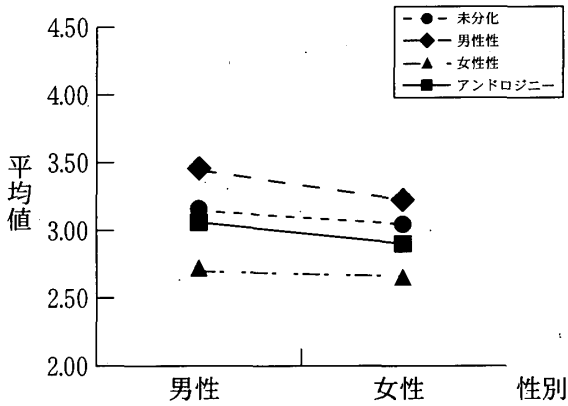


図4. P-における性役割タイプごとの平均値

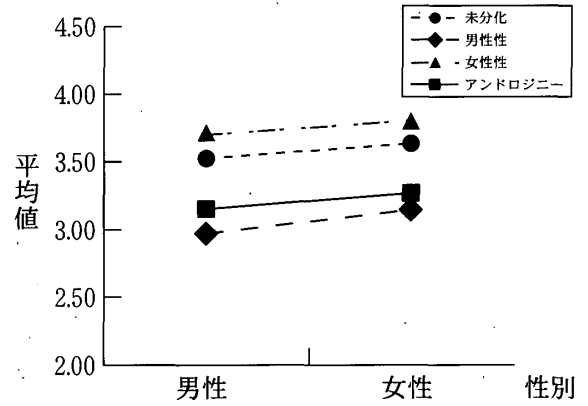


図5. S-における性役割タイプごとの平均値

P+において性役割タイプ×性別の交互作用が有意傾向であった ($F(3,276) = 2.62; P < .10$). 厳密な検証のため、下位検定を行った結果、性役割タイプの単純主効果が男女ともに1%水準で有意であり (男性; $F(3,276) = 20.02$ 女性; $F(3,276) = 15.40$), LSD法を用いた多重比較を行った結果、男性においては女性性=未分化<アンドロジニー=男性性、女性においては未分化=女性性<男性性<アンドロジニーとなった。性別の単純主効果は女性性においてのみ有意であった ($F(1,276) = 4.51; P < .05$ 男性<女性)。S+において性役割タイプ、性別の主効果がそれぞれ1%水準で有意であった ($F(3,276) = 21.21, F(1,276) = 19.47$ 男性<女性)。性役割タイプについてLSD法を用いた多重比較を行った結果、未分化<男性性<女性性=アンドロジニー、であった ($MSe = 0.23; P < .05$)。P-において性役割タイプの主効果が有意であった ($F(3,276) = 4.49; P < .01$) のでLSD法を用いた多重比較を行った結果、女性性<アンドロジニー=未分化<男性性であった ($MSe = 0.43; P < .05$)。S-において性役割タイプの主効果が有意であった ($F(3,276) = 6.14; P < .01$) のでLSD法を用いた多重比較を行った結果、男性性=アンドロジニー<未分化=女性性であった ($MSe = 0.36; P < .05$)。

性役割タイプと満足感や将来への考え方との関連を検討するため、人生満足、学生生活満足、

仕事優先、理想的結婚因子を説明変数とし、性役割タイプを基準変数とした判別分析を行なった。結果、4タイプでは全体的中率が低かったためアンドロジニーと未分化タイプの2タイプとで判別分析を行なった。結果、アンドロジニータイプの方は未分化の人よりも学生生活や人生に満足している傾向や、将来に対して積極的な考えである傾向が読み取れた（仕事優先(.54)、人生満足(.44)、学生生活(.50)、理想的結婚(.22)、全体的中率64.7%）被調査者を男女に分けてもほぼ同じ結果であった。

4. 考 察

本研究では青年期の被調査者を4つの性役割タイプに分け、どのようなタイプが環境に適応し心理的に健康であるのかについて調査を行った。具体的には現実の生活場面である学生生活や人生そのものを満足に過ごしているのはどのタイプなのか、将来の結婚や仕事についての考え方には一定の関係がみられるのかを検討し、さらに性役割の重要性を考えることを目的とした。今回の被調査者の性役割タイプについて見てみると、未分化とアンドロジニータイプに分類された学生の割合が男性性や女性性タイプのそれより多かった。当然のことながら男女とも性別と同じ性役割を有している者が多く示されたが、アンドロジニータイプでは男性の割合が非常に多いということが明らかになった。

各志向性ごとに性役割と性別についての分析から、適応的な個人志向性の傾向が強いのは男女ともにアンドロジニーと男性性タイプであり、また、適応的な社会志向性に関しては、アンドロジニーと女性性タイプでかつ女性の方が社会志向性の傾向が強いことが分かった。全体的には両志向性はともにアンドロジニータイプが最も志向的であり、一方最もその傾向が低かったのは未分化タイプであった。一方不適応的な両志向性の面ではアンドロジニーの志向性が最も低かったことから、このタイプに属する人たちは不適応とは関係がないように思われた。これらのことから Bem のいうように他のタイプよりより心理的に適応的であるという理論や、伊藤（1995）の提唱するに個人志向性、社会志向性をバランスよく有している方が適応的で心理的に健康であるという考えとも一致する結果が示されたといえる。

今回の調査では、さらに適応的な個人志向性を示すのはアンドロジニータイプだけでなく男性性タイプも他のタイプより適応的であることが示唆された。さらに、男性性タイプを最も有するのは男性であったことから男性は女性より個人志向性を示す傾向があると考えられ他方、女性性タイプの女性が社会志向性を示していた。これらのことは、男性が個性的主体的に個という自己を生かそうとする傾向を示し、女性が他者との関係性を重んじ社会への適応を目指しているという Josselson（1996）の理論と一致している。また Erikson が述べた個の確立の視点から検討しても男性がアイデンティティの確立の時期に獲得するものであり、女性の自分らしさは他者との親密な関係の中、つまり社会の中で形成される事が多いとの彼の指摘とも関連していると考えられる。

しかし、アンドロジニー以外のタイプについては、適応、不適応のいずれにおいても、個人志向性では男性性タイプが、社会志向性では女性性タイプがより志向的であるという傾向を示した。これらの結果は、アンドロジニー以外の性役割タイプを有する場合、青年期の途中である学生が個人や社会に適応的であることを志向しつつ自分自身をみいだしていこうとする一方で必ずしもうまく適応できない部分を感じているあらわれではないだろうか。

次に、性役割タイプと満足感との関係について検討したところ、学生生活満足、人生満足感や将来の仕事や結婚への意識はアンドロジニータイプであるほど満足感や仕事への意識が高いという結果であった。これらのことからアンドロジニータイプは前向きに人生に取り組み、満足した生活を送っているが、未分化タイプはそうではなく、不適応的であるようであった。しかし、彼らは具体的にどのような問題に不適応であるのか、また男性性や女性性タイプについての傾向に違いがあるかに関しては今回の結果から残念ながら言及できない。たとえ青年期のまだ発達段階においても、どちらかの性役割に偏るよりもできるだけ両方を有する方が社会的にも個人的にも肯定的に生きやすいということだけは確実のように思える。また性役割が親や社会、文化の影響を受けやすく、生まれてから早い段階で期待されるものであること、今後さらに社会が変化していくことが考えられることから、子どものころからアンドロジニー的な性役割を身につけるようなまわりや、社会からの働きかけが必要であると考えられる。

近年、女性の性役割観の変化は非常に大きいといわれており、男性もまた少しづつではあるが変化しつつあり、男女の差はかなり縮まりつつある。その中で今回の調査ではアンドロジニータイプは男性が多く女性では未分化が特に多かったことは注目すべき点であると思う。男性は早くから適応的自己を確立できるが、女性は、時間がかかる。それは、女性は他者との関係性に配慮しつつ独自の自己を求める傾向にあること、また、生まれてから期待される役割によって関係性に配慮するようになるため、彼女たちは社会が求める女性らしさを受け入れ、その後自分らしさを求めることになる。それゆえ女性は自己確立の時期を逃したり、子育てがひと段落するころに自己確立をすることとなり、自己確立がなされないために、不適応をしばしば起こすことが少なくない。今回の調査対象者の女性において不適応的である未分化タイプに分類された者が多かったのは、福井県内の女子学生が殆どであり伝統的な性役割観を重んじる地方といった地域性が少なからず影響し、女性特有の他者との関係性に配慮する傾向が強いといったことが要因の一つであると考えられるし、学生のときの考え方がその後の人生の行きにくさと関係するといった研究もあることから (Josselson, 1987, 1996) 今後の経過を検討すべきであると考えられる。

また今回の調査では被調査者の学年が1年から3年に及んでいることから同じ学生でもかなりひらきがあると、将来への展望も今後はより具体的な卒業後のライフコースに関係する調査などを行うことが課題である。

引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 1985 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) - 日本版 BSRI作成の試み 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 484-485.
- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Broverman, I.K., Vogel, S.R., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., & Rosenkrantz, P. S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. *Journal of Social Issues*, 28, 59-78
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R.J., & Griffin, S. 1985 The satisfaction with life scale. *Journal of personality Assessment*, 49, 71-75
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*, 64, 115-122.
- 伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 *心理臨床学研究*, 13, 39-47.

- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52
- Josselson, R. L. 1987 *Finding Herself : Path to Identity Development in Women*. San Fransisco : Jossey-Bass Publishers.
- Josselson, R. L. 1996 *Revising Herself : The Story of Women's Identity from College to Midlife*. New York: Oxford University Press.
- 柏木恵子・高橋恵子 2003 心理学とジェンダー 有斐閣
- 岡本祐子 2000 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 岡本祐子・松下美知子 2003 新女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- 下中順子・中里克治・河合千恵子 1990 老年期における性役割と心理的適応 *社会老年学*, 31, 31-11